

天国にいちばん近い島

森村 桂



天国にいちばん近い島

地球の先っぽにある土人島での物語 森村 桂

学 研

■読者のかたにお願い

この本をお読みになったご感想を、左記までお寄せいただけましたら幸いです。

内容、体裁についてのご感想、あるいは、小社の「レモン・ブックス」として今後出版を希望されるものなど、お気付きの点を何でもお聞かせ願いたいと存じます。

また私どもの出版物は、一字の誤植もないようにと努力しておりますが、万一文中に誤植がございましたら、どうか率直にご指摘くださいますように。

東京都大田区上池上二六四

学研／レモン・ブックス係

天国にいちばん近い島

昭和41年5月1日第1刷発行

著者 森村 桂
発行者 古岡 秀人

¥ 320

発行所 株式会社 学習研究社

東京都大田区上池上 264

電話 (720) 1111 (大代表)

振替東京 142930

印刷所 KK加藤文明社

製本所 難波製本所

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

G69203

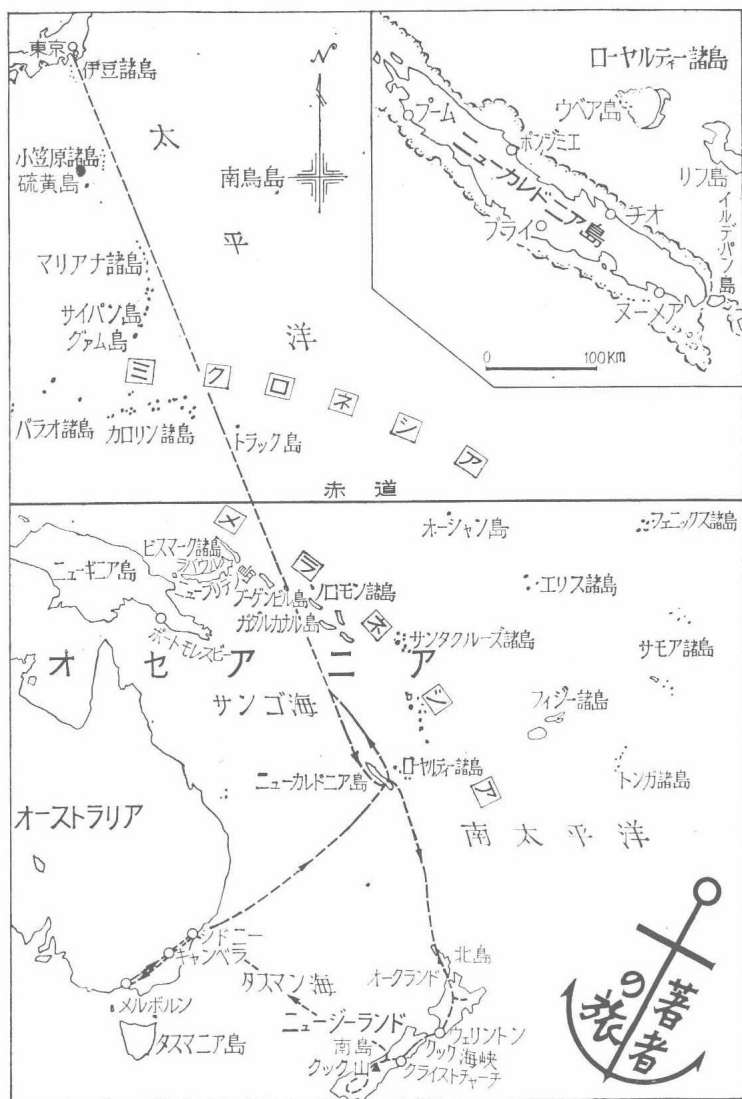
©K. Morimura 1966

目 次

天国にいちばん近い島 目次

ずっとずっと南の地球の先っぽに	6
天国にいちばん近い島があること	14
丸ビルの中で「神さま」に会う	29
借金のこと	41
処女航海船サザンクロス号出港	50
船は赤道を越え、はるかに南十字星を望むこと	62
フランボワイアンの花に誘われ密入国のこと	70
しだいにおそろ幻滅のこと	79
ホテルの夜とレセプション	88
三千円のホテルで一食四十円の食事のこと	96
ひとりさまよう町のこと	113
土人に案内された家のこと	

あこがれのヤシの実を飲む	123
とづげん社長の帰国命令を受ける	140
ビフテキとヒマシ油による拷問のこと	158
ひとことの「ボンジュウ」が招いた情けのこと	170
ウベア島への親善旅行	178
南太平洋より「新年おめでとう」	190
レモの演説に感動のこと	204
父に挨拶	215
指笛の鳴る町に赤い夕焼けのこと	226
別れ——天国の島に虹のかかること	240
あとがき	252



天国にいちばん近い島

ずっとずっと南の地球の先っぽに

天国にいちばん近い島があること

今になって思うと、父は出まかせをいったのかも知れないのだが、というのは、父は土人島になんか行ったことはないのである。北京と満州とビルマへ行っただけで、あとは日本から離れたことなんて一度もなかったのだ。けれど父が話してくれた時は、私がとても小さな時だった。だから信じてしまったのだ。

「海をね、丸木舟をこいで、ずうつとずうつと行くんだ。するとね、地球の、もう先っぽのところ、まっ白な、サンゴで出来た小さな島が一つあるんだよ。それは、神さまのいる天国から、いちばん近い島なんだ。地球のどこかで神さまをほしがっている人があると、神さまは、いったんそこに降りて、土人に丸木舟を出してもらって、日本へ来たり、アメリカへ行ったりするんだよ。だからその島は、いつ神さまがとびおりても痛くないように、花のじゅうたんが一面にしいてあって、天に近いからいつもお日さまを浴びて、明るくて、あったかいんだよ。その島の土人たちが黒いのは、どこの国よりもお日さまをいっぱいもらっているからなんだよ。その島の土人たちは、神さま

と好きただけ逢えるから、みんなみんな幸せなんだ」

私は、その島へ行きたくてたまらなくなっていました。その島はどこにあるのだろう。私は何度も父にたずねたのだが、父は、もう少し大きくなったら、丸木舟を買って連れてってあげるといっただけで、答えてくれなかった。

高校になると、友だちの中で、アメリカやヨーロッパへ留学する人が出て来た。その度に、私もあの土人島へ行ってみたいなと思うのだけれども、父の書く小説は売れないらしく、家はいつも貧乏していた。今度小説が売れるようになったら頼もう、そう思って、父の小説が売れるのを楽しみに待っていた。

にもかかわらず、大学二年の秋、父は何にもいわないで、突然死んでしまった。母とやっと就職のきまったばかりの兄と、そして私は、途方にくれ、毎日泣いた。

そんなある夜、私は夢を見た。まっ白な島の上に、パイアの木が高く高くそびえている。その先に、黄色い大きな実が光っている。私は土人の女の子だった。まっ黒な顔からはみ出るほどの大きな白い口をして、ヤシの葉をふりながら足をポンポンはずませて、パイアの並木をどこまでもどこまでも走って行く……。

目が覚めたとき、私はびっくりするほど楽しい気分であるのに気がついた。父は嘘という人ではなかった。買ってくれるというものは、きつと買ってくれたし、連れて行ってくれるところ

へは、いつか必ず連れて行ってくれた。だから、丸木舟を買って土人島に連れて行ってくれる話も、やっぱりそのつもりだったんだ。

天国は今、忙しくなったのだ。神さまが人手不足だから、父に手伝ってくれるように頼んで来たのだ。父は気が弱いから、断わり切れなかったんだ。今頃は神さまと好きな将棋でも指していて、私のことなんか、忘れてしまったかな、いいえ、忘れなんかしない。約束破ったこと、後悔しているかも知れない。あの島へ行って見よう。そうすれば、父に逢えるかも知れない。そうしたら神さまに内緒で、そっと丸木舟に乗せて連れて帰ってしまおう。

私は父にその島の名を聞いておかなかったことを後悔した。でも、その後悔は長くつづかなかった。私はアルバイトをせつせとして、学費を作らなければならなかったし、卒業したら就職もしなければならなかったから。

そうだ、その就職たるや、実に惨憺たるものであったのだ。

受けた会社はどこも落ち、やっとのことで、目ざす出版社婦人文化社には入れたものの、元来、あまり頭の回転も早くなく、働きのでもなかった私にとって、出版の仕事は忙しすぎ、からだも神経も疲れすぎた。そして冬になると、風邪をこじらせたまま、いつまでたっても、なおらなかった。寒気を押え押え、重い頭で、一日出社しては二日休み、その翌日会社へ行つては、早退けし、という日が冬中続いた。一緒に入社した人も、来年入社するというアルバイトの学生も、どんどん私のすべき仕事を、かたづけていった。私は常にミスをし、いつも小さくな^づて、ストーブにかじ

りついていた。

そんなある日、編集長が東京鉦業の鉦石運搬船が通っている、ニューカレドニアというフランス領の島の話をするのを聞いた。

その島は、気候は常に暖かく、一年中花が咲き、マンゴーやパイアがたわわに実り、原住民の土人は二日働けば、あとの五日は遊んで暮している、伝染病もなければ、泥棒もないところだという。

ここだ！ と私は思った。そこが父の言っていた、天国にいちばん近い島にちがいない。暖かければ風邪はひかないし、二日働くだけで暮せるなんて、まさに夢の島ではないか。この時私は疲れていた。自信もなにもすっかりなくしていた。こんなに一生懸命、朝から晩まで働いても、それでもみんなについていけない。失敗すまいと思っても、失敗はくり返し、あげくの果てにこの風邪はいつ治るのだろう。だれもが、私を出来ない人だといい、何をやらせても駄目な人間だという。よその会社にかわろうか。しかし、新しく入ればなおつらいように思えたし、結婚すれば少しは楽になるかも知れないけれど、ここに居る人たちが当り前なら、私はお嫁に行っても馬鹿にされ、毎日フーフーいつて暮さねばならないのかも知れない。

人間の生活なんて、こんな風にして一生を終えてしまうのだろうか。いいえ、そんなにあくせく働かなくても食べていける島があるという。それはまるで私のためのような島ではないか。そうだとすると神さまが私に教えてくれたのだ。でも、どうしてそんなに働かないでいいんだろう。そう

だ、それはこの島が、いつか父の言った天国にいちばん近い島だからだ。

その日から、私はニューカレドニアへの思いから離れられなかった。その島なら、私でも暮していける。幼いころ、父が話してくれた土人の子供たちがそこにいる。私を待っているかも知れない。その年の大みそか、私は退社した。会社にいる間中、遊ぶなんてことはなかったし、お茶一杯外で飲む機会もなかったから、貯金は二十万円になっていた。

しかし、その二十万円のお金で、何が出来るだろう。ニューカレドニアまではいい、いくらかかるのだろう。東京鉱業の鉱石運搬船が通っているというが、それは人も乗せるのだろうか。いくらくらいで乗せるのだろうか。どういう風に頼んだら乗せてくれるだろうか。客船以外に女を乗せるということはむずかしいと聞いたような気もする。いざとなると、まるで見当がつかなかった。そして、ただボンヤリと日を送った。私は実際問題となると、ひどくおっくうになるたちだった。また、もし私が行くことになれば、母はどうなるであろうか。父が死んでしまってから、母は、もう四年以上にもなるのに、すっかり元気をなくしていた。兄は転勤して豊橋にいるし、私がいなくなったら、母はわびしくてたまらないだろう。そう考えると、ニューカレドニアなど、とてつもなく遠い島のような気がして来るのだった。

二月のはじめ、その日また私は夢を見た。あの白い島から、いつかの黄色いパイアが、土人の子供たちが、私を呼ぶ声を聞いたのだ。私はとび起きた。あの島で土人の子たちが、私を待っている。私を迎えてくれるところが、この世の中にある。父は話してくれたのだ。私が行きたがってい

ることを。

私は電氣をつけ、電話帳をめくり、東京鉱業の住所をうつした。社長に手紙を書こう。その人がどんな人か知らないし、その会社がどういう会社かも知らなかった。ただそんな遠いところに船を出して、鉱石を運んでいるのは、きつとたいした会社なのだろう。その社長といえ、多分苦勞してその会社を作った人にちがいない。きつと大人物なのだろう。もしその人が大人物で、私の手紙が、価値のあるものであったら、必ずその人はわかつてくれる。私はとおきのおきの便箋に心をこめて手紙を書いた。

ニューカレドニア島にあなたの会社の船が行くことを人づてに聞きました。私はその島が父の言っていた天国にいちばん近い島ではないかと思ひ、その島にぜひ行ってみたいと思いました。お金は二十万円ありますが、それを船賃にして、行かせていただけませんでしょうか。

便箋三枚にわたって一氣に書いた。二十万円だせば、ゆうゆう乗せてくれそうな氣もするし、二十万円というお金は、一笑にふされるほどわずかなお金のような氣もした。

イチかバチか、これに十円切手をはって出せばいい。だめだったとしても十円損しただけで済むじゃないか。そう思おうとしたが思い切れなかった。これは十円の切手をはった、ただの三枚の便箋にすぎない。けれども私にとっては、幼いころからの夢をたくしたもののなのだ。これで返事が来なかったら、あるいは悲しいものであったら、その心が否定されたことになる。そうしたあと、なおまた違う手段をさがすなんて氣には、なれないだろうと思った。二度ともうこんなことを考えな

くなくなってしまうかもしれない、それがこわかった。一日考え二日考え、三日目の朝、心をきめた。今の私を救うものはこれしかなかった。信じる以外なにが出来よう。

私は赤いポストの前に立った。その口に深く手をつこんで、ポツンと封筒が落ちるのをたしかめた。そしてポストの口をポン、ポン、ポンと三つたたいた。返事がもらえるというおまじないだと、いつかだれかがいったのを思い出したのだ。あたりに人がいないのをたしかめて、パン、と手を合わせ、ピョコッとおじぎをした。

すると、とても楽しくなって、新宿の街を歩いた。その時、偶然先輩に会った。彼女は私があまりニコニコしているので不思議がった。

「どうしたのモリ、いいことあったな」

「うん、これからね」

「なによ、話さないよ」

「私ね、もしかしたら、ニューカレドニアへ行くかも知れないんだ」

「そう、よかったわね。なんの会社？」

「ちがう、ちがう。ニューカレドニアってね、土人のいる島なんだ」

「へエー、そう」

彼女はボカンとして、面白くもないという顔をして、ちがう話をはじめた。

この一週間、私は実にウキウキした気持で過ごした。赤いポストを見れば、ポンと叩いてやりた

くなり、船の写真を見ればニヤニヤし、だれかれかまわず、私ねニューカレドニアに行けるかもしれないのよ、といった。ところが、どの友だちも先輩と同じく、ヘエ、そう、といっただけで、それ以上聞こうとする人はいなかった。よっぽど私と外国行きとは結びつかなかったらしい。また、ニューカレドニアという名前そのものが未知であったし、土人島などと聞けば、ニューギニア高地人などしか想像しなかったのだろう。そういうところへ行くのは、頭がよくって横文字がペラペラで、スーパードレイと名のつく人でなければならなかったらしい。およそ私とそういうイメージとは結びつきようがなかったのだ。

さてしかし、一週間を越し、十日たち、二週間が過ぎた。まあ、えらい人のところへはたくさんの手紙が来ているから、まだ返事が書ききれないのだろう。今ごろだれかと相談してくれているのかもしれない。と思ううちに一か月がたち二か月がたってしまった。けれど、いっこうに返事は来なかった。

この調子ではもはや返事は来そうもない。何か調べたり協議したりするにしても、一言くらい秘書からなりと連絡があってもいいはずだ。会社には人がたくさんいるのだから。もしかしたら読んでくれなかったのかな。いや、何を図々しいことをいつているのかと、とうの昔に屑籠に入れられてしまったのかも知れない。

私は、あきらめようと思った。しかし、ひとたび火がついてしまったものは、なかなか消すわけにはいかなかった。

丸ビルの中で“神さま”に会う

そのころ私は、ある雑誌に出ている“神戸”の特集を見た。港に外国船がいっぱい泊っている。異人館の道がある。元町、三の宮と外国のものを売る店がある。

そうだ、せめて神戸に行ってみよう。土人島とはおよそ違うけれど、外国船がいっぱい入るなら土人島からの船も来るかも知れない。日本中で最も外国の空気の入っている土地なのだ。私は大阪にお嫁に行っている友だちのコダと、母の親友の家が明石にあるのを幸い、その二軒を頼って行ってみることにした。母はすぐ賛成した。学生時代はとも明るかった私が、会社に入ってからすっかり自信をなくし、やめてからも学生時代のように人を集めたりしないのを心配していた。旅行でもすれば少し気分が変わると思ったのだろう。

私は明石に泊めてもらうことにし、明石の家の人や、コダと待ち合わせて神戸のメリケン波止場を、北の町の異人館を、あきずに歩いた。そしてトア・ロードでサンドイッチを食べ、三宮センタ―街でフランスの石けんを買い、元町の明るいネオン通りを何度も歩き、千円奮発して小さな舟に